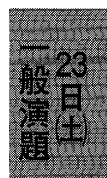


P2-33-10 子宮頸癌早期再発症例と高い放射線感受性を示した長期無再発症例における neutrophil-to-lymphocyte ratio (NLR) と病理学的特徴の比較

佐賀大

大隈恵美, 西山 哲, 福田亜紗子, 橋口真理子, 中尾佳史, 横山正俊

【目的】当科では腫瘍径 4cm を超える, FIGO III 期までの bulky な子宮頸癌症例には同時化学放射線療法を主に行っている。扁平上皮癌で, 同じ治療を受けても 1 年以内に再発する症例は予後不良であり, second line の治療も無効であることが多い。早期再発症例と, 1 年以上再発しない症例について検討し, 治療開始時点で再発のハイリスク群を予測することを目的と集簇がめだちした。【方法】当科でインフォームドコンセントの後, 同時化学放射線療法を施行した, 腫瘍径 4cm を超える子宮頸部扁平上皮癌 Ib2 期~IIIB 期のうち, 治療終了から 1 年以内に局所再発または遠隔転移再発を来した 10 症例と, 1 年~7 年再発せずに経過している 10 例を比較検討した。初診時治療前の血液検査のデータから neutrophil-to-lymphocyte ratio (NLR) についての比較検討を行い, また治療前の子宮頸部生検標本において病理学的特徴を比較検討した。【成績】早期再発群における NLR の平均値は 4.70, 1 年以上の無再発症例群における NLR は 2.52 で早期再発群において高い傾向が見られた ($p=0.021$)。また原発巣の生検標本では, 早期再発症例ではリンパ球, 形質細胞の浸潤, 集簇が目立ち, 生検標本内ではあるが, 無再発症例群よりも高頻度にリンパ球, 形質細胞の浸潤が見られる傾向にあった。【結論】治療前の好中球/リンパ球が高い子宮頸癌症例は放射線治療に抵抗性で再発率が高いことが予想された。また, 再発率の高い群では原発巣へのリンパ球の浸潤も多く見られ, 高い再発率を予測する手段の一つになると推察された。



P2-34-1 臨床教育及び研究教育の現状調査から, 今後の産婦人科を担う人材育成を考える (第一報)

国立成育医療研究センター周産期・母性診療センター

三井真理, 谷垣伸治, 左合治彦

【目的】産婦人科専攻医・初期研修医に対する臨床教育及び研究教育の現状を明らかにし, 人材育成のための教育体制について検討する。【方法】当院倫理委員会の承認を得て, 2015 年 8 月, 日本産科婦人科学会登録 639 施設を対象とし, 質問紙票による調査を行った。解析は選択回答の質問は SSPS を, 自由記載の質問は, 質的データ解析ソフト NVivo10 を用いた。【成績】256 施設から有効回答を得た。(回答率 40.1%)「日々の臨床における疑問への教育」「学会発表の指導」「論文作成の指導」はいずれも初期研修医よりも専攻医へ行っている傾向であった。(それぞれ 87.7%, 55.2%)独自の臨床及び研究教育プログラムを有する施設が 65.4%, 12.1%, 臨床及び研究教育が重要と認識している施設は 91.4%, 38.2% であった。研究教育支援の希望は既に充足している施設及び労働環境が厳しい施設で低い傾向を認め, 全国規模の教育支援をする場合, 「何らかの形で協力できる」と回答した施設は 95.1% に及んだ。労働環境は医師数, 指導医一人あたりの分娩件数は地域, 施設ごとに差が大きく, 限られた人数で外来・病棟・直当をこなす, 教育や研究まで手が及ばないという意見も寄せられた。【結論】労働環境の厳しさは研究教育への意識を低下させている傾向にあり, 教育に対する認識及び労働環境の違いが, 慢性的に産婦人科医の人員確保が困難である現状の一因と示唆された。臨床教育および研究教育も資源として集約化し, 多施設で教育支援を行う体制の構築が必要である。

P2-34-2 総合周産期母子医療センターにおける妊娠前相談外来開設後 1 年の現状

聖隷浜松病院

村越 毅, 松下 充, 神農 隆, 鈴木貴士, 鳥居裕一

【目的】妊娠前の不安に対する相談窓口として総合周産期母子医療センターである当院では臨床遺伝専門医による遺伝カウンセリング(遺伝相談外来)を開設していたが, 遺伝相談以外の妊娠・出産異常や内科的合併症など様々な不安に対する相談窓口として「妊娠前相談外来」を開設した。相談内容およびその後の妊娠についての現状を検討する。【方法】2014 年 9 月~2015 年 9 月に妊娠前相談外来を受診し相談を行った 24 組の夫婦を対象とした。妊娠前相談外来は, 完全予約制の外来として一枠 30 分を原則として事前予約を行った。外来助産師により相談内容によっては遺伝相談外来を予約し, 遺伝カウンセリング以外の相談内容については妊娠前相談外来を予約した。相談女性の主訴, 年齢, 経妊経産回数, その後の妊娠の有無について診療録から後方視的に検討した。【成績】相談女性 24 人の年齢は中央値 33 歳(範囲 27~43), 未産婦 7 例(29%)であった。相談内容(複数あり)は, 内科的合併症 9 例(38%), 既往妊娠異常 5 例(21%), 既往分娩異常 7 例(29%), 前児異常 5 例(21%), 不育症 3 例(13%), 高齢 2 例(8%)であった。経産婦での相談内容は既往分娩異常(35%)が, 未産婦では内科的合併症(71%)が最も多かった。相談後に妊娠に至った女性は 7 例(29%)であった。外来開設後最初の 6 か月は 1 件/月の相談ペースであったが, 以後は, 3 件/月のペースと増加した。【結論】総合周産期母子医療センターにおける妊娠前相談外来は, 遺伝カウンセリングとは異なるニーズが存在し, 前回妊娠分娩異常および内科的合併症による相談を行うことで次回妊娠を安心して, また, 安全に管理できる可能性がある。